

主 題：神のくださる救い

聖書箇所：ヨハネの福音書 3章1－6節

きょうは、神様の方から皆様に伝えるようにと預かっている“救い”についてのお話を、ヨハネの福音書からさせていただきます。ここにはクリスチャンである方も、そうでない方もおられると思いますけれども、皆さんがこの救いについて神様がどのようなことをお与えになろうとしているのかをよく理解して、それに感謝してこれからも喜んで歩んで行かれることを、神様は望んでおられます。そのことをまずお伝えしておきます。

きょうのテキストはヨハネ3：1－6ですが、より背景を理解していただくために、2：23から見てください。

ヨハネ2：23－3：6

「2:23 イエスが、過越の祭りの祝いの間、エルサレムにおられたとき、多くの人々が、イエスの行われたしるしを見て、御名を信じた。:24 しかし、イエスは、ご自身を彼らにお任せにならなかった。なぜなら、イエスはすべての人を知っておられたからであり、:25 また、イエスはご自身で、人のうちにあるものを知っておられたので、人についてだれの証言も必要とされなかったからである。3:1 さて、パリサイ人の中にニコデモという人がいた。ユダヤ人の指導者であった。:2 この人が、夜、イエスのもとに来て言った。「先生。私たちは、あなたが神のもとから来られた教師であることを知っています。神がともにおられるのであれば、あなたがなさるこのようなしるしは、だれも行うことができません。」:3 イエスは答えて言われた。「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」:4 ニコデモは言った。「人は、老年になっていて、どのようにして生まれることができるのですか。もう一度、母の胎に入って生まれることができますでしょうか。」:5 イエスは答えられた。「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、水と御霊によって生まれなければ、神の国に入ることができません。:6 肉によって生まれた者は肉です。御霊によって生まれた者は霊です。」

1. ヨハネの導入 2：23－3：2

23節の前の2章には、この箇所の背景となる状況がヨハネによって書かれています。ガリラヤのカナで、水をぶどう酒に変えられたイエスは、過ぎ越しの祭りの際にエルサレムに行かれて、そこで商売をする神殿の商人たちを追い払われました。

① ユダヤ人の信仰

そして23節には、そのエルサレムで多くの人々がイエスを「信じた」とあります。この「信じた」ということばは、実はその直後の24節にも全く同じギリシャ語が使われていて、そこでは「イエスは、ご自身を彼らにお任せにならなかった」という訳がなされています。この訳は「御名を信じた」と言うユダヤ人たちがイエスを信用しなかったという意味に解釈できます。ご自身が全知の神であられるイエスは、当然それぞれの人の心もご存じであるわけで、信じたその人自身は、自分はイエスのことを信じていると思っけていても、イエスはその人の心を見て、それがまだ完全な信仰ではないとわかっておられたということです。ユダヤ人たちは、イエスがメシヤとしてこの世に来られることを信じていました。ローマからの支配を解放する政治的支配者、王として来られることを願っていたのです。そのしるしとして、イエスを神として崇めることをイエスは示されましたけれども、ユダヤ人たちはそれを信じることができなかったということです。

②ニコデモの心

続いて、3章で登場してくるのはニコデモという人物です。1節には、彼が「ユダヤ人の指導者」だと書かれています。そのニコデモがイエスを、しかも夜、訪問したことが2節に書かれています。ユダヤ人といえば、神様から与えられた律法を忠実に守って生活する人たちだということを私たちも知っています。その指導者であったニコデモが、宗教については多くのことを知っていたはずですが、そのニコデモがどうして夜に、イエスを訪問する気になったのでしょうか？イエスがガリラヤでなされたしるしについては、ニコデモのところにもきっとその評判が届いていたであろうことは推測がつかます。そして、ニコデモが自分の関心事である宗教のことについて、イエスという当時評判の説教者から自分の知らない何かを聞けるのではないかという漠然とした疑問や関心を持ったことは、私たちも容易に推察することができます。ニコデモは、2節で「先生」と呼びかけます。宗教指導者でもあった律法の教師たちをユダヤ人たちはそう呼んでいました。ニコデモは、「私たちは、あなたが神のもとから来られた教師であることを知っています」と言います。ヨハネの福音書の7章あたりに出てくるユダヤ人たちが、イエスをどのように評価したかと言うと、「正規に学んだことがない」人と言って軽視していたことに比べると、ニコデモが「先生」と言って、イエスのことを評価しているのは非常に驚くべきことです。どういう理由で、彼はイエスのことをこのように肯定的に見ることができたのでしょうか？それは、同じ2節の続きで、神のもとから来たのでなければ、だれもこのようなしるしを行うことはできないと言った彼のことがばからわかります。ニコデモは、イエスの行われたしるしを評価していたのだと読み取ることができます。

そんなニコデモをイエスご自身はどのように見ておられたかと言うと、2：24にあるユダヤ人に対するのと同じように、その救いを十分に評価しているとは言えなかったからです。彼らにはまだ神から教えられるべき大切な真理があったからです。ご自身神であるイエスは、ニコデモのそのような必要をご存じで、それを教えようとしているのです。それは救いということですが、救いについて、私たちもその真理を十分に正しく知っているのでしょうか？それを拠り所として、神様の望むような仕方です歩むことができているのでしょうか？

2. イエスの教え 3：3-5

3節は、「まことに、まことに」ということばで始まります。神であるイエスが、大切なメッセージを語る時に、いつも使われたことばです。イエスはその救いとはどんなものかということについて、ここでニコデモに教えようとしているのです。3節からのイエスとニコデモとの問答では、イエスが救いに関して、特に大切なポイントを二つ語っておられます。

① 新生とは

その一つ目は、3節にあるように、「新しく生まれ」るということです。その読んで字のごとくですが、神学用語ではそれを“新生”と言います。

a. 新しく上から生まれる 3節

この「新しく」ということばは、原語ギリシャ語では、“アノセン”という副詞で「上から」という意味を持っています。つまり、「神から」という意味です。神からの力によって生まれなければ、人間に救いは与えられないということをイエスは言いたかったのです。言い換えれば、ユダヤ人が信じているように人の力によって、律法を守り行うことによって、天の御国に入ることはできない、救われることができないという真理です。実は旧約聖書にもアブラハムの例を引いて、創世記15：6に「彼は【主】を信じた。主はそれを彼の義と認められた。」と書かれています。アブラハムのどのような行いでも、態度でもなく、彼が「【主】を信じた」というその心を神が受け入れられたのでした。これは信仰による救いということですが、私たちはそのことを信じています。もちろん信じた人に信仰の実が認められなければ、その人が救われているとは言えませんが、私たちは行いではなく、信仰によって救いを得ることができるのです。

b. 水によって生まれる 5節

さらに5節では、水によって生まれるということが言われています。水はユダヤでは洗い、つまりきよめの象徴です。それが意味するところは、人はきよめられなければいけない存在であるということです。もっと言うと、すべての人が罪を持っているということです。イエスが言いたかったのは、すべての人間は神の前に汚れているので、神の国に入ることができない、救われることができない。だからきよめられる必要があるということでした。生まれながらの人間には罪という大きな問題があり、神はそれを喜んでおられないことをはっきりと示しているのです。イエスの指摘は、まずその神の評価に目を開き、変えられなさいということでした。

c. 聖霊によって生まれる 5節

5節で次に示されていることは、御霊によって生まれるということでした。新しく生まれるということの具体的な働きが聖霊によって行われることを述べています。救いは聖霊の働きであるということです。バプテスマのヨハネは、マタイ3：2で「悔い改めなさい。神の御国が近づいたから。」（以下、新改訳第2版）というメッセージで、水のバプテスマを授けました。この「悔い改め」とはどういう意味でしょうか？旧約聖書に現れる預言者たちは、周囲の民と同化し、偶像を礼拝するユダヤ人たちを責め、それらの偶像を捨てて神に立ち返るようと、繰り返しメッセージを語りました。旧約最後の預言者であるヨハネのメッセージもそれと同じことを語っているように見えますけれども、ヨハネの要求した悔い改めというのは、それより一歩進んだものです。それはその後、「神の御国が近づいたから」というつけ加えがあることでわかります。偶像礼拝のような一つ一つの罪を悔い改めることはもちろん、人の心は根本的に改めなければならないということを彼は語っているのです。「神の御国」というのは、人ではなく神の支配が及ぶ社会です。人間の心の中の神様の支配ではなくて、現実の社会を神が支配するということです。ヨハネの言っているのは、そこでは人間の定めた規準、言いかえると、この世の規準が受け入れられないばかりか、自分の心を変えて、神に規準を置かなければ、その社会で生きることができないということです。

それでは、どうすれば人間は自分の心を変えることができるのでしょうか？もちろん人間は自分の力によってそうすることはできません。答えは、聖霊に心を明け渡すということです。5節のニコデモへの返答にあって、イエスが「御霊によって生まれなければ」と言っているのもそれと同じ意味です。つまりこの世の規準ではなく、聖霊に導かれて神の規準を取るようになりなさいということです。そしてこの世の規準ではなく、神の規準を取るようになった人は、どのように変わっていくのでしょうか？それまで自分の欲しい物を得るためにあくせく努力していた人が、神様のきよさを知り、そのすばらしさのゆえにそれを追い求めるように変えられていくということです。

このような働きの中で、聖霊はどのように動かれるのでしょうか？イエスご自身がその御霊の働きについて、ヨハネ16：8で「その方が来ると、罪について、義について、さばきについて、世にその誤りを認めさせます。」と語られています。御霊は人の心に働いて、神にだけ心を向けるように、そして自分中心の態度の中に潜む罪に目を開かせて、それらを捨てて神の規準に近づきたいと願うようになされるということです。このように聖霊に心を明け渡して歩む人になることが、新しく生まれるということなのです。

d. 新しい心

それと対照的に生まれながらの人とは言う、これは肉によって生まれた者であり、自分自身の価値観やこの世の規準によってしか歩むことができません。ここで注目してほしいのは、その新しい神の規準を自分の規準にプラスしなさいと教えられているのではないということです。新しく生まれるということは、古い自分を捨てて自分の今まで培ってきた経験や常識を捨てるということです。それを持ったまま、自分中心の生き方をしながら、神にも喜ばれるようにすることは不可能です。このことはニコデモがよく知っていた旧約聖書にも書かれていたことでした。エゼキエル18：31には「あなたがた

の犯したすべてのそむきの罪をあなたがたの中から放り出せ。こうして、新しい心と新しい霊を得よ。イスラエルの家よ。なぜ、あなたがたは死のうとするのか。」とあります。また、エゼキエル36：26には「あなたがたに新しい心を与え、あなたがたのうちに新しい霊を授ける。わたしはあなたがたのからだから石の心を取り除き、あなたがたに肉の心を与える。」と書かれています。神は新しい心を持つようにと教えられ、そのことを約束されていました。しかし、ニコデモを初めとするユダヤ人の教師たちは、そこに書かれている神の約束を本当に理解はしていなかったということです。ユダヤ人たちは当時、イエスのしるしと働きを通して多くの人が信じるという神の働きを見ていたはずですが、それは明白な事実でした。にもかかわらず、ユダヤ人たちは、旧約聖書で約束されたとおりに、神が多くの人に新しい心を与えられているという現実を目を留めず、いや、むしろ目を背けて、神の与えようとされる救いを、自分たちの既存の常識や価値観のために拒絶していたのです。

② 神の御国とは

次に、2番目のポイントである神の御国について見ていきましょう。マタイ6：10の主の祈りの箇所、次のようなことばがあります。「みこころが天で行われるように地でも行われますように。」先ほども述べたように、神の御国とは神の規準が一般の常識として受け入れられる社会です。それは神のみこころですから、現実に来ます。この世の規準ではなくて、神の規準ですべてが測られて、さばかれる社会が来ると言うのです。またそれは、マタイ13：44-46によれば、畑の宝や真珠のようなものであると表現されています。「：44 天の御国は、畑に隠された宝のようなものです。人はその宝を見つけると、それを隠しておいて、大喜びで帰り、持ち物を全部売り払ってその畑を買います。：45 また、天の御国は、良い真珠を捜している商人のようなものです。：46 すばらしい値うちの真珠の一つつけた者は、行って持ち物を全部売り払ってそれを買ってしまいます。」とあります。果たして私たちは救いをこのようにすばらしいものだと実感しているのでしょうか？こんなすばらしいものだから、自分の持っているものすべてを捨てても、これを手に入れたいと本当に思っているのでしょうか？もし思っていないとすれば、私たちに足りないものは何でしょうか？もしかすると私たちは神様が与えてくださるこの救いの重要な要素を何か見落としているのではないのでしょうか？このメッセージの最後に、神による救いのまとめとして、聖書のほかの箇所からも引用して、その要素を振り返ってみたいと思いますので、ぜひご自身で確認してみてください。

神の御国は、神のあわれみのメッセージでもあります。マタイ4：23には「イエスはガリラヤ全土を巡って、会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、民の中のあらゆる病氣、あらゆるわずらいを直された。」とあります。同じような箇所が9：35にもあります。「それから、イエスは、すべての町や村を巡って、会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、あらゆる病氣、あらゆるわずらいをいやされた。」と。ここではイエスが癒しの奇跡をされたこととセットで、御国の福音が語られています。つまり、そのメッセージの中には、癒しとその源を同一にする神のあわれみが含まれているということです。私たちが神の御国が来ると言うメッセージを聞く時に、私たちの心の中に安息を得るようにと、神があわれみをもって教えてくださっている、そのようなメッセージなのです。

3. 神による救い

そして最後に、救いについてみことばが教えている重要なポイントをおさらいしていきたいと思えます。私たちが自分に与えられている救いを感謝できていないと感じる時、今からお話しするすべてのことが救いに含まれていることを自分は本当にわかっていたのか、ぜひチェックしてみてください。

① 選び

まず一つ目に、それは選びであるということです。そのことについては、ローマ書8：29に「なぜなら、神は、あらかじめ知っておられる人々を、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたからです。それは、御子が多くの兄弟たちの中で長子となられるためです。」とあります。「御子が多くの兄弟たちの中で長子

となられるため」に私たちを選ばれていた、このようなことが神様のメッセージとして私たちに与えられています。「あらかじめ知っておられる人々」とも書かれています。私たちの行く末、私たちの姿、救われること、それは神様がすでに永遠の昔から私たちを選んでご存じであったということです。これを“神の予知”と言います。

同じようなことがエペソ 1 : 4 - 5 にも「すなわち、神は私たちを世界の基の置かれる前からキリストのうちに選び、御前で聖く、傷のない者にしようとされました。:5 神は、ただみこころのままに、私たちをイエス・キリストによってご自分の子にしようと、愛をもってあらかじめ定めておられたのです。」と書かれています。私たちが救われたのは、偶然でも自分の意思によるものでもないということがここからわかります。神は私を、あなたを愛されたがゆえにあらかじめ選び、神の子となることを予定されていたということが、ここに書かれているのです。それほど私たちの救いというのは、神様から特別なものとして与えられているということです。

このように言うと、神がある人々を特別扱いしているかのように思われる人がいるかもしれませんが、決してそういうことはなく、エゼキエル 18 : 32 には「わたしは、だれが死ぬのも喜ばないからだ。——神である主の御告げ——だから、悔い改めて、生きよ。」とあります。つまり神様のみこころは、すべての人が救われることであり、ということは、イエスの十字架の死もすべての人のためであったということを見ることができるとのことです。

② 悔い改め

二つ目の重要な要素は、罪の悔い改めということです。罪人である私たちは、まず聖い神の前に自分が罪に汚れていることを知的に認め、次に、そんな自分の罪を悲しみ、申しわけなく思うこと。これはギリシャ語で“メタメロマイ”ということばで表されます。このことばは感情面で「特定の罪に対して申しわけなく思うこと」という意味です。さらに意思の面で「心を変えて新たに生きていこうと決心すること」を“メタノエオー”ということばで表します。どちらも日本語の訳では「悔い改める」ということです。つまり悔い改めとは、まず自分の罪を知的に認め、それを悲しみ、最後にそれから離れるように心を変えて歩いていくという意味を含むものだと言われます。もちろんこのようにすることは、聖霊の働きであって、人の力によってなされるわけではありません。

③ 義認

そして三つ目に、悔い改めた人に対する神の応答として、その人を義と認めるという神様の働きがあります。イザヤ 53 : 5 - 6 にはこうあります。「:5 しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。:6 私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かつてな道に向かって行った。しかし、【主】は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。」。十字架で罪を贖われる御子への預言ですが、私たちはその贖いのゆえに罪を赦されたのです。

ローマ 4 : 7 にも「不法を赦され、罪をおおわれた人たちは、幸いである。」とあります。このようにして、神はキリストによって私たちを義と宣言することがおできになるようになりました。

義と宣言されても、私たちには現実の罪の性質が残ります。その性質に対しても、神は恵みをお与えになっていることを見ることができます。Ⅱコリント 5 : 21 を見ると、「神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方にあって、神の義となるためです。」とあります。私たちの罪の代わりに、キリストの義が私たちに接ぎ木されたのです。そして反対に、私たちの罪はキリストに接ぎ木されたのです。このことにより、私たちに正しいことを行う力が与えられ、神のみこころにかなうことができるようになるという約束があるのです。これは単に、神が私たちを名目上、義と宣言するだけでなく、私たちが実際に義を行うことのできる力を、神様はキリストの贖いによって与えられたことを意味しています。

④ 新生

四つ目が、“新生”新しく生まれるということです。きょうの箇所、イエスが最もニコデモに教えたかったことでした。救いの時に、私たちは新しいのちを与えられ、自分の古い考えや性格を捨てて、新しい神の規準に従って生きる者となったということです。

⑤ キリストとの結合

そして五つ目に、神との結合ということがあります。信じた私たちには聖霊が与えられ、その聖霊は私たちの心の中に住んでくださいます。Iコリント6：19に「あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。」、このように私たちのからだの中には聖霊が住んでいてくださいます。このことによって、私たちは神と一つのものとしてされています。

また、エペソ4：15には、クリスチャンとキリストとの関係についてこのようにあります。「むしろ、愛をもって真理を語り、あらゆる点において成長し、かしらなるキリストに達することができるためなのです。」、私たちが成長させられていくということは、私たちがかしらなるキリストと結合されて、キリストに似た者として成長する、神様は私たちにそのようなことを予定されているのです。私たちの司令塔はいつもキリストであり、その司令塔の発する命令に従う者として私たちは訓練され、成長していきます。

また、その関係は夫と妻にもなぞらえています。同じエペソ5：31には「それゆえ、人は父と母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりは一心同体となる。」とあります。夫と妻が一心同体であるように、クリスチャンはキリストと一体となるのです。私たちは、キリストを離れては何もすることができないし、どんな状況の中でも自分ではなくキリストの望む歩みをするようにと召されているのです。

⑥ 神の子とされること

六つ目に、そうしてキリストのもとに導かれたクリスチャンは、神の子とされるという約束もあります。ローマ8：23に「そればかりでなく、御霊の初穂をいただいている私たち自身も、心の中でうめきながら、子にさせていただくこと、すなわち、私たちのからだの贖われることを待ち望んでいます。」とあります。神様は救われたクリスチャンの肉のからだまでも贖ってくださるという約束を下さっています。この肉のからだのために、私たちはいろいろな世の災いを知り、財産や健康を願い、容姿や知識や才能といったことにこだわって生きて来ざるを得なかったのです。神様の約束はそういったものがすべて無意味となる時代がやって来る、そのような約束なのです。

またルカ15：31は、放蕩息子の箇所ですが、このようにあります。「父は彼に言った。『子よ。おまえはいつも私といっしょにいる。私のものは、全部おまえのものだ。』」、これは父なる神様とユダヤ人との関係のことで言われているのですけれども、私たちクリスチャンも同じで、私たちが父なる神の持つておられる莫大な財産すべてを相続するという約束です。今、私たちは何か足りないものがあるかのように、世のことに心を煩わせて生きていますけれども、それらすべてのものを充足させる神の財産を相続するという神様の約束を、私たちはすでに手に入れているのです。その時、私たちが足りないと感じるものは何一つなくなるはずで

す。またガラテヤ4：6にあるように、神様のことを「アバ、父」と呼んで何でも話すことができる立場を、私たちは特権として神からいただいているのです。

さて、きょうここまで神の下さる救いという真理について、みことばから見てきましたけれども、ここには、すでにみことばを信じたと思われるクリスチャンの方、そしてまた信じていない方々がおられると思います。メッセージは同じですけれども、その2種類の方に向けて、違ったことを迫っていると思っています。

まず、すでに救われているクリスチャンとして歩んでいる方にお聞きします。あなたは新しく生まれさせられた人ですか？救われる前の常識や思考に従って今でも歩んでいるではありませんか？初めて

夜にイエスを訪問した時のニコデモのように、聖書を知っていると自負していても、この世の規準で歩むのではなく新しい規準に目を留めて歩めているでしょうか？最後にお話しした救いに含まれるキリストとの一体化や神の子としての新しい立場を感じて歩んでいるでしょうか？現在の生活において、あなたが何か足りないと考えるもの、例えば具体的には、健康やお金や名声、いろいろなことがあるかもしれませんが、そういったものにとらわれて歩んでしまっていないでしょうか？この救いの中に含まれる、神様が与えようとされている要素にもう一度目を向けてみましょう。自分が今与えられていると思っているものの中で、与えられていないものが何一つないことに私たちは気づくはずですが、もしも私たちのだれかが救われる前のこの世の常識や思考や価値観などを捨て切れずにいたら、そしてまたそのゆえに救いを実感できないでいたらどうでしょう？それはあなたが本当に救われているかという根本的問題である可能性があります。確かに教会に導かれた時、誘われた時、何らかの興味を持って教会の敷居をまたいだことでしょう。その時、聖霊の働きも当然あったと思います。ですが、あなた自身がみことばによって聖霊が解き明かしてくださる救いの本質を十分に心に受け取りましたか？教会で人々と交わり、会話し、一緒に作業をして満足を感じておられるかもしれません。しかし、その満足感が人との交わりの中だけで感じるものであって、神に対する感謝を実感として伴わないとしたら、それはおかしいことです。ニコデモは律法をよく知っていましたが、イエスから新しく生まれるという聖霊の働きを示された時、その霊的意味に目を開くことを拒みました。つまり、今の快適な状態を維持したいという願望のために真理に目を背け、自分の心の安逸を優先するという霊的な反曲が見られました。あなたの心の中にも同じ思いがある可能性があります。これは悔い改めるべき罪と言えます。

救いについて初めてお聞きになった皆さん、もしあなたの中に、きょう紹介したニコデモという人物が心の中に与えられたのと同じような疑問、関心が沸き起こっているのなら、ぜひその疑問や関心について、そばにいるクリスチャンの方にお尋ねください。私を含めクリスチャンであればだれでも、神からの真理のあかし人として、知っていることを分かち合うことを願っているはずですが。

クリスチャンの皆さん、きょうのメッセージで神の下さる救いについて何か気づきがあったでしょうか？自分は救われていると思っていても、感謝が余り感じられない時、教会において何かほかの喜びを見出そうとしていなかったでしょうか？もう一度救いに含まれるすべての恵みを思い出して、本来のすばらしい恵みに目を開かれるようにと願っています。